

藤並の森

Vol.8

高知県立
文学館



●仁淀村のしだれ桜 (写真提供/桑名 源氏)

リレー随筆⑧ 高知とSF —— 森下一仁

日本にSFを根付かせるのに最も貢献したのが早川書房の雑誌『SFマガジン』であることに異存のある人はいないだろう。一九五九年十一月末創刊、初代編集長は福島正実だった。

福島は日本人に馴染みの薄いSFのイメージを定着させるため、あれこれ腐心した。中でも雑誌の表紙は難問だった。当時、海外のSF雑誌は宇宙船や怪物、その怪物に襲われる美女といったケバケバしい絵で表紙を飾っていた。しかし福島は、文学色豊かな大人の読み物としてのSFを打ち出そうと考えていたので、そのようなものにするつもりはなかった。あれこれ悩んだあげく、新進の画家中島靖侃(せいいかん)を起用した。中島の描いた『SFマガジン』創刊号の表紙は薄い紫を基調に、淡い色彩を施しその上に立体的な線が描かれたものだった。見ようによっては、異星の風景とも未来の廃墟ともとれる。芸術性豊かな作風で、福島にとっても納得のゆくものだったに違いない。

中島靖侃は昭和三年高知県野市町深瀬生まれ。本業は画家だが、本の装丁の仕事も多く、『SFマガジン』のほか井上靖全集などを手がけた。七十一歳の今も栃木県矢板市に健在である。中島の父は中島菊夫という漫画家。

戦前の『少年倶楽部』に『日の丸旗之助』を連載したといえ、年輩の方は思い出されるのではないだろうか。高知出身の漫画家はたくさんいるが、この人のことは忘れられがちのようで残念である。中島の母は、やはり高知県出身の作家で中島さと子。代表作『咲きさんちよ』はテレビドラマ化されて好評だった。

中島靖侃は『SFマガジン』創刊から約百号にわたって表紙絵を描きつづけた。SFのイメージを視覚によって定着させた中島の功績は大きい。

最近SFの装丁を手がけている高知県出身者に岩郷重力がいる。私事になって恐縮だが拙著『思考する物語』も装丁していたのだ。

ビジュアルな面での高知出身のSF関係者はこれくらいにして、創作に目を転じてみよう。

探偵雑誌『新青年』の初代編集長森下雨村には少年小説も多い。その中にはSFの趣向のものもあり、たとえば『科学小説・怪星の秘密』は火星での冒険譚のようである(一部しか見ておらず、全容は不明)。雨村が活躍したのは主として戦前だったが、戦後では河野典生がハードボイルドタッチのミステリのほかに『緑の時代』や『街の博物誌』といった詩情あふれる幻想的SFを書いている。田中英光の次男光二は高知出身とはいえないかもしれないが、『幻覚の地平線』をはじめとして多数のSF作品があり、日本SF作家クラブの会長もつとめた。純文学畑の倉橋由美子『スミヤキストQの冒険』もユートピアSFの範疇に入るといっていいだろう。また、劇作家別役実の書くメルヘンにもSF的な肌触りのものがある。最近では、高知在住の西澤保彦の書くミステリにSFの設定がふんだんに用いられている。最後に、SFの翻訳を手がけている県出身者には、宮脇孝雄、大森望、細美(幹)遙子らがいることも申し添えておきたい。

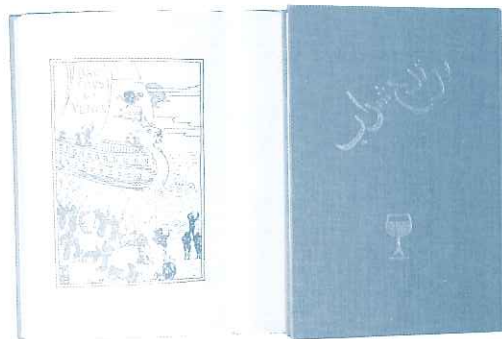
(SF作家・評論家、佐川町出身)

◆次回企画展によせて◆

平成12年4月15日(土)～平成12年5月28日(日)

— 二〇〇〇年春季企画展 —

「没後40年 追憶の吉井 勇」



『酒ほがひ』 明治43年9月

な感情流露の類唐歌風を示し酒と恋愛の青春哀歌が中心となっています。平明でしかも強い調子で歌いあげられたこの歌集は、歌壇に新風を起しました。その詠嘆の万葉的調子は、勇の生涯の歌風の基調をなしています。この『酒ほがひ』は高村光太郎が装幀し、口絵一葉は木下李太郎が南蛮船を描き、全頁に藤島武二のカットを配しており、展示のなかでも是非ご覧になっていたきたい書籍の一つです。

豪放な艶冶の色のある独自の歌風をつくった吉井勇は、昭和三十五年十一月十九日、多くの人に惜しまれながら、歌とともに歩んだ七十四年余りの生涯を閉じました。

勇は、『明星』（新詩社）の盛時を過ぎたころ彗星のように文学界に現れました。

君がため瀟湘湖南の少女らはわれと遊ばずなりにけるかな
かにかくに祇園はこひし寝るときも枕の下を水のながるる

明治四十三年に刊行された『酒ほがひ』は、勇の青春時代の代表作で、異風



佐藤春夫あて書簡
明治43年8月22日
『酒ほがひ』の解説の礼状



吉井勇（右）と浜本浩（左）

が、多くの詠まれた歌の中からはロマンチストで寂しがりやの勇が見えてきます。

わが家に光をはなつものありと吾子を
たたふる愚かなる父

『鵜飼杯』より

世を棄てむ心おこせど吾子のこと思へば
むげに棄てもかねつつ
死ぬもよし寂しく生きてあるもよし草
木のごと相模野にあむ

『人間経』より

これらの歌は神奈川県下の南林間都市でひとり身をひそめるように暮らしていた日々を述懐し、寂しい心情と我が子しげるへの愛しみがただよい人生の転期に立っている苦悩がうかがえます。

昭和六年、勇は維新の志士であった祖父友実（幸輔）と関わりの深かった高知を訪れます。友実は坂本龍馬が鹿児島を訪れたとき各地を案内しました。展示の乙女宛龍馬書簡には、そこでの行動の様子が記されています。京都では、龍馬に暗殺を案じ薩摩屋敷への避難を申し出ています。勇もまた、この地、土佐で彼の人生におおきな影響を与えた伊野部恒吉と逢い、その親交は生涯続きました。

友いまだ生きてかあらむこちして
土佐路恋しく我は来にけり

『朝影』より

この歌は昭和十六年に恒吉が亡くなったときに詠んだ歌で、昭和三十四年には旧伊野部恒吉邸の歌碑に刻まれ、その除幕式にも出席しました。勇が詠んだ土佐の歌の白筆色紙の多くを、恒吉がじゃばら綴じの帖にしています。今回、展示予定で勇の土佐への愛着を感じていただけないでしょうか。

昭和八年十月、東京に帰った勇は、夫人の関わった事件から栄典を停止せられ、大きな経済的精神的苦悩を背負い、かねてから考えていた隠棲をしようと決心するようになります。

「猪野々の宿は、この日記の通り、いともわびしき木賃旅籠だったが、その時分の私には、ここよりほかに安住の地がないように思われて、一年あまりもこの宿屋住居をした揚句に、とうとう昭和十（九）年には、高知の友人伊野部恒吉が取りこわす隠居所を譲り受けて、その古材木で小さな草庵を建てることにした。

(中略) 身から出たさびとはいえ、こんな生活をしなければならなくなった自分の身の上を考えたりして時を過ごした。そうやっている間でも、やがてはどうか友だちに、会っても恥ずかしくないような仕事をしたいということを片時も忘れたことはなかった。」

『私の履歴書』より

注 猪野々・高知県香美郡香北町

昭和九年十二月、ついに勇は、猪野々に草庵をつくり「溪鬼荘」と名づけました。ここでの生活は、勇自身が草庵の炉端の人生修行というように、心の修行の場となり、再び勇を立ち上がらせました。温かい人情や友情と自然の静けさは傷ついた勇の癒しの場所にもなったことでしょう。昭和十二年、勇は、山里の「溪鬼荘」を棄てて山を下り、高知市築屋敷に新居を構え、東京から孝子夫人を迎え、今までの孤独な生活に別れを告げました。そこから見ていた筆山につるぎたち土佐に來りぬふるさとはじめてここに見たるここに

『人間経』より

という歌碑が昭和三十一年に建立されました。

「高知の新居は鏡川の川岸にあって、向こうに筆山や鷺尾山が見え、静かな落ちついたところだったけれども、住むことわずかに一年ばかりで、昭和十三年十月には、別になんの考えもなく、京都まで出ていく気になったのだが、それが今まで二十数年間も住むようになっては、全く思いもしないことになった。」

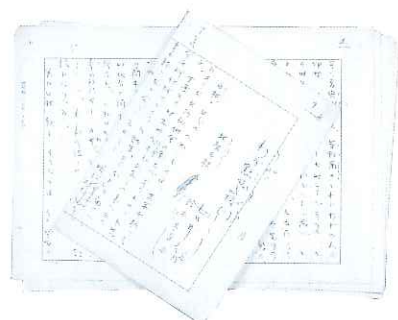
『私の履歴書』より

勇は、晩年京都に落ち着くまで、つねに居所を転じて一カ所にとどまることはありませんでした。

人間的な哀愼を追い求め、人間的な欲情の美しさ、かなしさに耽溺していった勇は、年とともに深化を加えて人生を味解した者だけの諦観が匂う歌を詠むようになりました。戦後の昭和二十三年一月には、宮中歌会始めの選者に、八月には日本芸術院会員に推挙され、勇の文学界での地位は不動のものとなりました。妹とともに庭の落葉を焚くこともわが



『黒髪集』 大正5年4月



わが點鬼簿(1)北原白秋

年祝ぎのひとつとぞせむ
あきらめて京のわび居に聴きて居り朝のどろき夕のどろき

『形影抄』(最後の歌集)より

勇は、半世紀にわたる生涯において数十冊の歌集を世に出していますが、大正期以降、文壇から離れ超然として、みずからの歌風を貫きつつ、悠然と文学の大道を歩いていきました。歌人としてだけでなくすぐれた戯曲や随筆・小説もたくさん書いています。都踊の作詞は、昭和二十五年にはじめて「京洛名所鑑」を作って以来、毎年、勇の歌詞で行われなくなる時までそれは続けられました。

今回の展示には、遺墨や風情漂う装幀の初版本のほとんど、勇の師であった与謝野鉄幹・晶子の資料や、谷崎潤一郎をはじめ多くの友人との書簡やその初版本、「明星」「スバル」などの雑誌も展示します。明治・大正・昭和に生きた歌人たちの交流や、哀愼ただよう古井勇の優美な文学の世界を味わっていただければ幸いです。

は幸いです。

昭和三十四年の歌碑・除幕式をはじめ度々の来高時にお世話なをさり、親交も深かった古井勇研究家の妻島季男氏に「追憶の古井勇」と題してご講演をいただくことになっています。高知での勇と、その文学をより深く拝聴できるのではないかと、今から期待されます。

(学芸課 嶋崎るり子)



雑誌「スバル」

【主な展示資料】

- 「酒ほがひ」他 おもな初版本
- 色紙・軸などの遺墨
- 谷崎潤一郎など関わりの人々との書簡や初版本
- 祖父・吉井友実(幸輔)の書簡や遺墨など

◆記念講演会

- ◇日時/4月22日(土) 午後2時から
- ◇演題/追憶の古井勇
- ◇講師/妻島季男氏(古井勇研究家)

※肉声を聞く(昭和32年RKCラジオにて放送の番組)

◆次々回企画展によせて◆

二〇〇〇年初夏企画展 「宮尾登美子」展

『一絃の琴』…そして『権』『春燈』
『朱夏』…映像化された作品群(仮)

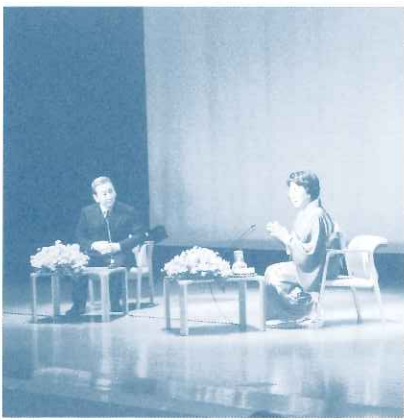
平成12年6月6日(火)～平成12年7月2日(日)

手織り木綿・紬のような独自の流麗な文体で、日本的な風土や因習の中で生きる女性の心理を丁寧な描き出し、人々に深い感動を与えつづけている宮尾作品の数々。

今回の企画展では、現在「宮尾本 平家物語」を執筆連載中の宮尾登美子先生にスポットをあて、作品『一絃の琴』を中心に、宮尾文学に親しんでいただけるよう展示構成し、宮尾文学の魅力をご紹介します。

宮尾作品の多くは、映画化、ドラマ化、舞台化され、いずれも好評を博してきました。

そんな中、直木賞受賞作『一絃の琴』がNHKドラマ化。三月二十七日(月)から七月まで、十八回シリーズで放映されています。



また、三月四日(土)には、県民文化ホールで「宮尾登美子さんと橋本大二郎 知事の対談」『一絃の琴』と上佐の女性たちを語る夕べ」が開催されました。

NHK放送文化賞受賞の朗報も入ってきたこの日は、雨天にもかかわらず、五百名を超える皆様が会場に足を運んでくださり、会場内は、終始、和やかな雰囲気包まれていました。お二人のテンポある会話と、近森律子さん演奏による一絃の重厚な音色に、観客は魅了され、楽しいひと時をお過ごしいただけたと思います。

ところで、宮尾登美子先生は、一九二六年(大正十五)高知市緑町四丁目(現二葉町)にお生まれになられ、私立高坂女学校卒業後、一九六二年(昭和三十)『連』で「婦人公論」女流新人賞を受賞。この受賞がきっかけとなり、一九六六年(昭和四十一)四十歳で作家活動を目指し上京。紆余曲折を繰り返しながら、一九七三年(昭和四十八)自伝ものの代表作と言われている『権』で太宰賞を受賞。この時は、審査員全員一致で受賞が決定、作家として高い評価を得ることとなります。そして、一九七七年(昭和五十二)『寒椿』で女流文学賞受賞。続いて一九七九年(昭和五十四)には『一

絃の琴』で直木賞を受賞されました。その後日本の風土や因習の中で生きる女性を独特の流麗な文体で描きつづけた、一九八二年(昭和五十七)『鬼龍院花子の生涯』の映画化をきっかけとし、数多くの作品が映像化、舞台化され、幅広いファンの心をつかまれました。翌年には『序の舞』で吉川英治賞を受賞。一九八九年(平成元)には、芸術分野における功績で紫綬褒章を受章されています。

一九九〇年(平成二)には文学における新境地を開かれた『松風の家』で文芸春秋読者賞受賞。一九九六年(平成八)には、長年温めてこられた『クレオパトラ』を朝日新聞に連載、歴史物への新境地を開拓され、現在は「宮尾本、平家物語」を週刊朝日に連載されています。

今回は、土佐に伝わる「一絃琴」に魅入られ、物語の全編をとおして水のようには流れる琴の音色に、自らを厳しく律し、凛と生きた明治の土佐の女性の姿を描いた『一絃の琴』を中心テーマに取り上げています。

この一絃琴という楽器は、ご存知ない方が多いかと思いますが「長さ三尺六寸六分(約一・一m)の桐、杉などの胴に一本の絃を張った琴を言い、須磨琴、板琴、独絃琴とも呼ばれています。形状は

中国の琴と日本の大和琴の形が混成したものと考えられ、『日本後記』の延暦十八年(七七九)七月 午の記に「この月一人あり、小船に乗りて三河の国に漂着す(略) 自ら謂う天竺の人なりと。常に一絃の琴を弾ず歌声哀楚なり」とあり、上佐への伝来は、幕末伊予の人真鍋豊平に学んだ、山北(現・香我美町)の郷土、門田宇平によって伝えられ、その後大石弥太郎、松島有伯、坂本龍馬の姉坂本乙女、島田勝子といった人々に伝えられました。姉より伝授された龍馬が、この一絃琴を好みよく奏でていたことは、あまりにも有名です。そして、島田勝子の流れを汲む、人間国宝秋沢久寿栄(一八八三～一九六八)が「一絃琴白鷺会」を結成、今日上佐一絃琴として伝えられており、この秋沢久寿栄との出会いが作品『一絃の琴』執筆のきっかけとなられたようです。



昭和59年(1984)年5月、高知市の島田寿子さん宅で一絃琴を聴かれる、宮尾登美子先生

作品『一絃の琴』は「方正、堅実、細緻な楷書の世界である。草書、行書で書

閲覧室から



『寅彦と虎彦』

柿原忠彦 著

き流している作品ではない。女流の筆とは思えぬ重い文体である。とくに第一部は、鷗外の史伝小説をおもわすものがある。」と小松伸六氏が評されているように、言葉を大切に、一字一句が丁寧に取り扱われています。上梓まで約十七年の期間を要し、主人公格の二人の女性の背後に見られる動乱の時代の推移、一絃の歴史、土佐の風物詩まで描き出されている『一絃の琴』。選者からも高い評価を得られたこの作品は、故郷土佐を改めて確かめる愛着の深い一作であり、これまでの自伝ものとは異なった、芸道ものとして、宮尾文学の新たな方向性を示唆しているといえるでしょう。また、五回も書きなおされたという草稿などは、

資料としても非常に興味深いものです。



「一絃の琴」の草稿と著作本

今回の企画展では、宮尾先生からご寄贈いただいた文学資料のほか、新たに資料を追加し、先生のご指導、ご協力のもと

『日本文学雑誌』田宮文学の世界他（昭和60年代文藝社刊）に続く著者渾身の第二作である。「望郷寺田寅彦」と「寺田寅彦の文学」からなる第一部と、二人の「とらひこ」の縁をたどり「田宮文学と土佐」に言及した第二部と、折々の短文を集めた第三部から成る。寺田寅彦（一八七八―一九三五）と田宮虎彦（一九一―一九八八）二人の「とらひこ」の縁は虎彦誕生直後の命名時に遡るが、虎彦が東京帝国大学の新聞部時代、相まみえたことも二度あったらしいとのこと。このあたりの考究も二人を愛する著者ならではのものの「憂愁と望郷」―二人に共通する、その心情の内奥を見つめる目は優しい。「昭和」という時代の幕開けとともにあった著者のこれまでの来し方も思われる。寺田寅彦と文学との関わりに迫った筆者ならではの創見。寺田、田宮両作品と土佐の地についての実証的な考察など今後必読の基本文献となるだろう。県出版文化賞と寺田寅彦賞のダブル受賞もむべなるかなと納得させられる一冊。（一九九九年十一月発行、三千円、当館売店でも発売中）閲覧室でもお読みいただけます。

とに準備を進めています。

今回の企画展を通して、より多くの皆様方が宮尾文学にふれていただければ幸いです。

主な展示資料（予定）

口誌、書簡、写真、草稿、生原稿等の書跡、一絃琴、初版本、雑誌、地図、ポスター、写真、賞状、直木賞受賞の際の野千代先生からいただいた山茶花の着物など

関連行事

- (1) 記念講演会 「宮尾文学を語る」
- (2) 朗読と音楽の会
- (3) 映画会「櫻」

他



「全集」（平成6年刊）

（学芸員 津田加須子）

資料受贈報告

（平成十二年十一月〜平成十二年三月）

敬称略

▼濱本篤・「伝 武市半平太自刃の短刀」ほか▼林亮・「詩集」序▼神原忠彦・寅彦と虎彦▼黒岩孝・寂静の路ひっそりしずか▼野中遠子・「遊29号」ほか▼井上孝夫・「ゴンドラの詩」ほか▼吉井滋・「好色一代女」ほか▼秋田稔・探偵随想79号▼柴田暎子・「詩集」日花▼吉村正・「歌集」樟葉譜▼狩野信児・明治百人一首版本▼窪内隆起・「たて糸よこ糸」▼川村昇陽・「奇跡発見」▼島崎徳恵・「琴歌抄」ほか▼妻島季男・「日本の詩歌3」ほか▼有島記念館・いま見直す有島武郎の軌跡▼二玄社・高村光太郎 書の深淵▼猪野睦・満州文化記▼ほか▼国分寺・土佐国分寺の仏像▼吉川村教育委員会・吉川村史▼津野輔猷・田岡典夫 色紙▼ほか▼定福寺・定福寺の歴史と文化財▼九津礼多加夫・人間文学24号▼小樽文学館・伊藤整の日本文壇展▼北海道文学館・北海道文学館常設展図録▼仙台文学館・みやぎの杜の文学者たち▼古河文学館・「和田芳恵展」▼立原道造記念館・立原道造展▼前橋文学館・筆墨のかやき 米倉大謙展▼「壺」発行所・白衣燦々▼東京創元社・「思考する物語 SFの原理・歴史・主題」▼土屋文明記念文学館・「群馬文学全集4巻」ほか▼山梨県立文学館・資料と研究5▼東京国立近代美術館・「近代化と明治の美術」ほか▼藤村記念館・「図録」島崎藤村▼青森県近代文学館・資料集1 有明淑の日記

※このほかたくさんの方から寄贈いただきました。厚く御礼申し上げます。

悼・大原富枝先生

1月27日午後零時27分、心不全のためご逝去。87歳。

大原富枝さんを弔む

橋田憲明

第五十四回日本芸術院賞・恩賜賞を受賞されたのは平成十年六月二十九日であった。授賞式は上野公園の日本芸術院会館で行われ、その様子を報じた新聞に、天皇、皇后両陛下が受賞者から作品などを前に業績の説明を受けられる写真がのった。大原さんはどんなことをいわれたであろうか。七月五日、中村稔先生をお招きして開いた記念講演会の、開会の挨拶の中で私はそのことに触れた。次の二つのことをいわれたではなからうか。

大原さんはここでも、ふるさとへの愛をいよいよ深く感じられ、ふるさとと吉野川のことを話されたのではないかと。全集発刊（平・七）の折、読者へのことばの中で、「ふるさと」の山や川には恩愛がひとかたならずでございます。吉野川の流れや四国山脈の山々が生きてあるように、その流れの中に、山々の小径のほとりに私の書いた作品たちも、そとと秘やかに生きつづけさせてやりたいと、そう願っております」と書かれている。二つ目には、「私は自分の書きたいものだけしか書かないマイナーな作家ですから、このたびの受賞は思いもよらないことでした。でも好きな仕事をしてきてそれを認めていただけることは大変幸せなことだと思います。」これは受賞の報をきいての感想。この二つのことを陛下にいわれたのではないか。

大原さんは、世への告別のことを残すとしたらどういふことばであったろう。そう考えるときもまた、同じであった。大原さんは、「故郷の全てが懐かしい」といわれる。そして人間の運命をみつめ、生命のかがやきをうたいつづけてきた一筋の生であった。最後まで「草を褥に小説牧野富太郎」を書きながらの壮絶の死であった。

文学館の大原富枝コーナーに「吉野川流れの岸に」と書いていただいた色紙（一九九六・一一）が飾られている。冬から春へ移りゆく吉野川の岸辺に、青草も萌えはじめたことであろう。ふるさとの懐深くみ魂は帰ってこられた。いまは安らかに眠りくださいとお祈りするばかり。

（高知県立文学館館長）

大原富枝先生を偲んで

鍋島寿美枝

活字を通して敬慕していた大原先生に、初めてお会いしたのは一九九二（平成四）年四月のことだった。本山に先生の文学館がオープンした記念に募集された「ふるさと随筆」の一般の部で、思いがけなく受賞の榮に浴することになり、ステージの奥へご挨拶に伺うと、梅ねず色の和服姿も華やかな先生から「ああ、あなた鍋島さんね。」と、きれいな高いお声を掛けていただいた。

拙作「ふるさと—鷹の渡る空」は、娘を失った体験を心のふるさととしての空に寄せて書いたものだが、随筆というよりは短編のような作風だった。そのため、フィクションではないかと危惧があったと知らされたので、後日、事実の証の意味で娘の日記をまとめた遺稿集「心の頂にさらされて」を謹呈した。二十二歳で命を絶った青春の記録に涙を流された先生は「正直な若い魂のいたましさ」と題して「海燕」八月号の巻頭エッセイに取り上げ、また、責任編集に当たっておられた作品社の日本の名随筆シリーズ別巻「日記」のなかにも、遺稿の一部を収録して下さった。

こうした縁から「大原先生を偲む会」に加わり、会報誌「やまなみ」の編集にもかわるようになって、晩年の先生とのご親交に恵まれてきた。座談会での情熱的なお話や、なかなか小旅行など、思い出は数々あるが、一番印象深いのは一九九三（平成五）年九月の軽井沢旅行である。

高知からの会員仲間七名と東京近郊の方達とで軽井沢プラザホテルに二泊し、海拔千メートルの爽涼な自然と豊かな文学の香りを満喫した。台風一過の浅間の雄姿、塩沢湖畔の高原文庫、山風のかよう落葉松林、数々の文学碑、小諸の懐古園や千曲川の望める所までも足をのびし、ときどき先生の解説をいただきながら巡る旅の、何と楽しかったことか。

さらに、私たちは千ヶ滝西の別荘へもおじゃました。先生の「夏の家」は見上げるばかりの松・胡桃・樅などの喬木と、白いサラシナシオウマや撫子に似たフシクロセンノウ等の草花に囲まれて四百坪の敷地に建っていた。私たちは庭に面した座敷でお茶をご馳走になり、仕事場にしておられる二階のお部屋まで拝見した。胸の震える思いであった。

晩年の先生はとてもお元気で、度々の帰郷や講演、各地への取材旅行の一方、「風を聴く木」「今日ある命—小説・三ヶ島霞子の生涯」そして人生は輝く「原阿佐緒」「詩歌と出会う時」「吉野川」と単行本を次々と出版、その合間には雑誌の連載や新聞などのエッセイも多数発表されている。一九九六（平成八）年には全集八巻を刊行、二年後、日本芸術院賞、恩賜賞を受賞、芸術院会員にもなられた。昨年六月、肺炎で三週間ばかり入院されたが、退院後は「穏やかならざる季節の到来」を予感されつつも「厄払いをしたようなもの」とおっしゃって、雑誌「サライ」に新しく連載を始められていた。

青春時代は病と闘い、戦中戦後の厳しさを越えて、善意の人々に支えられながらも、決然と「ひとり暮らし」を貫き、「書くことは生きること」とひたすら文学に打ち込まれたご生涯だった。やはり、すごいお方であった。畏敬の念でいっぱいである。

あの独特の輝くようなお声が耳元に聴けると、あついものがこみ上げてくる。ご高齢ではあられたが、もう一度お元氣になれるものと思っていたので残念でない。しかし、残された数多くの作品のなかに、未ながく生き続けてゆかれることを信じている。

高知市在住
「大原富枝を偲む会」会員
会報誌「やまなみ」編集員



北原白秋文学碑の前で
中央—大原先生 筆者前列右端

◆◆◆文学館日誌 1999年12月～2000年2月◆◆◆

12月

◆12日 「生涯100年作家記念映画会」開催。「伊豆の踊子」「二十四の瞳」上映（11月17日と同内容）。文学館ホールにて。参加者約65名。◆18日 平成11年度冬季企画展「岡本弥太生誕100年記念展 新世紀の詩人たちへ」開幕。「青き霞（あられ）」の高士（こうし）、「南海の宮沢賢治」などと呼ばれた土佐の詩人、岡本弥太の作品と生涯や、同時代の土佐詩壇などについて紹介。会場にて、弥太作詞・下村史作曲の「わが涙」テープなども流す。／文学カレッジ②「自由民権の生んだ女性文学」。講師・猪野陸氏（詩人）。◆24日～30日まで館内燐蒸（第一収蔵庫、第二収蔵庫）◆26日（～1月1日）年末年始休館。

◆8日 古典文学室にミニ企画コーナー「まほろばの甕（いらか）」（協力 高知県埋蔵文化財センター）展示。紀貫之が土佐に赴任した時代の瓦や陶器などの出土品を展示。貫之ゆかりの高知県南国市付近から出土したもの多数。◆15日 文学カレッジ③「土佐の女性文学」。講師・高橋正氏（徳島文理大学教授）参加者約60名◆23日 岡本弥太展記念講演会「岡本弥太と『日本詩壇』」開催。講師・嶋岡晨氏（詩人・立正大学教授）。岡本弥太同時代の詩壇や、弥太の詩人としての活動にふれる。講演終了後、弥太の地元・香我美町の「絃琴グループのみなさん」による、ミニ演奏会も開催。展示の資料協力者でもある高木美智氏の提案による演奏会



1/13 岡本弥太展記念講演会

で、演目は「白牡丹園」と「土佐の海」。文学館ホールにて。参加者約130名（うち香我美町からの団体約20名）。岡本弥太四女・藤田泰子氏も来場。◆27日 作家・大原富枝氏ご逝去。◆29日 朗読の会（モチモチの会、15人の会）。藤沢周平作品などを朗読。参加者約80名。

2月

◆1日 作家の肉声を聴く「田中貢太郎『土佐漫談』」。作家田中貢太郎の命日（桃葉忌）に、昭和11年録音の貢太郎の肉声を聴く。文学館ホールにて。参加者約30名。三里史談会の久保田昭賢氏ほか来場。◆5日 文学カレッジ④「大江・岡本両選集より」。講師・片岡文雄氏（詩人）。◆10日 岡本弥太長女・坂倉瑞香氏来館。◆13日 岡本弥太展閉幕。会期中の入館者約1200人。◆19日 土佐ゆかりの作家・司馬遼太郎を偲ぶ、第4回上佐業の花忌開催。文学館ホールにて。生前ゆかりの窪内隆起氏（元産経新聞記者）の講演と伊藤周子氏（テレビ高知アナウンサー）による司馬作品の朗読。参加者約100名。◆23日 新収蔵資料「伝 武市半平太自刃の短刀」展示紹介。常設展示室内にコーナー展示。昨年末に作家・浜本浩の遺族より寄贈された武市半平太が自刃の際に使ったと伝えられる短刀（銘「濃州住兼浦」）を、ゆかりの資料などと共に展示。5月14日まで。◆26日 「大原富枝先生を偲ぶ会」開催。文学館ホールにて。ビデオ鑑賞のほか、高知朗読奉仕者友の会メンバーによる大原作品の朗読や、吉村淑甫氏、岡上千枝子氏、内田とし子氏、松田光代氏など、生前ゆかりの方々による思い出を語る座談会。参加者約150名。◆29日 「寅彦のランチ」花物語「椿」開催。高知市五台山の牧野植物園内レストランにて。寺田寅彦の好んだ食事と花をテーマにした昼食会。植物園の散策ほか、金沢典子氏の司会で、永国淳哉氏、シェフ・岡林氏のお話も。参加者37名、会費・3000円。（メニューは、「甘鯛の番茶風味のくんせいサラダ仕立」「高知の春のトマトとともに」「牛肉のカツレツ・昔ながらのソースで」「苺のクラシックショートケーキ」など）



2/29 寅彦のランチ



2/23 「伝 武市半平太自刃の短刀」



2/19 土佐菜の花忌

「伝 武市半平太自刃の短刀」について

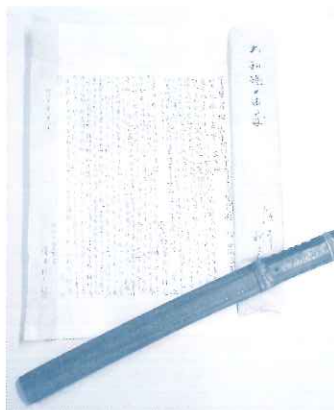
作家浜本浩のご遺族から昨年末にご寄贈を受けたもの。浩の父濱本利三郎氏（一八六四～一九二四）が明治二六年松山歩兵第二十二連隊除隊に際し、上官の長澤中隊長から賜ったとのこと。銘は「濃州住兼浦」とあり、県刀剣審査会の山本俊夫先生にみていただいたところ今から約四百年前の文明「天文頃（室町末期）」の古刀で、「平造り身幅広く重厚く、中心は松垣鑑で筒反り、豪壮」とのこと。

「武市半平太自刃の短刀」との伝について、それを幼少の頃、祖父利三郎氏からお聞きになっていた浜本浩の長女山村泰さんが、よく記憶に留められていて、実弟浜本澄夫氏（浩の長男）の遺品の中から刀が見つかったのをきっかけに、お話をいただいたものである。

「浜本家の家宝」とされ、明治二七、八年の日清戦役従軍時には肌身離さず携行し過酷な戦地でも、その短刀「大和魂」を力とされ激戦をくり愛蔵された利三郎氏の記述には真情がこもる。

武市半平太とのゆかりについては、利三郎氏自筆の由来書に詳しいが「武市半平太自刃の……」の確証は容易ではない。しかしながらいち歳月を閲して此処にたどり着いたこの一振り、の古刀を見ると、襟を正さずにはいられない厳肅な気持ちになります。

なお、この刀を通じて大変お世話になった山本俊夫先生が去る三月五日に急逝されました。ここに深甚の感謝をこめ、心よりご冥福をお祈り申し上げます。



高知県立文学館カレンダー

2000年
4～6月

4月—April

5月—May

6月—June

ミニ企画展

「伝 武市瑞山自刃の短刀」——5/14(日)まで ※4月中旬に展示替え

作家・浜本浩のご遺族から寄贈された、幕末勤王の志士・武市瑞山自刃の短刀と伝えられ、家宝とされてきた短刀「大和魂」を、その由来書、関係資料などもあわせ、常設展示室内でご紹介しています。

●北見志保子を偲ぶ

「平城山（ならやま）」鑑賞会
～琴と歌とお話と～

※4月2日(日)14時～

※文学館ホールにて。入場無料
(往復はがきで申し込み。定員120名
先着順)

●第3回児童生徒文学作品

朗読コンクール

本年度も県内の小中学生を対象とした
朗読コンクールを開催します。

なお、詳しい内容につきましては、4
月中旬に決定予定。ポスター、チラシ
等で、お知らせ致します。

文学専門講座

田岡嶺雲『数奇伝』を読む

※解説：高橋正先生

※日時：4/15、5/6、5/27
6/24、7/1、9/23
の各土曜日
午後1時半～3時

※定員30名（先着順）。
往復はがきに〒、住所、氏名、
TEL記入の上、お申込み下さ
い。

夏季特別展「金子みすゞの世界」関連イベント

◆朗読と音楽「金子みすゞのゆうべ」コンサート(仮)

高知県安芸市在住のシンセサイザー奏者・西村直記氏の演奏
と、女優・日色ともゑさんの詩の朗読で、幻の童謡詩人と言
われた金子みすゞのやさしい世界にふれていただくコン
サート。

◆日時／7月23日(日)18時開場

◆県民文化ホール（オレンジ）

※前売り券は4月23日発売開始予定。詳しくは文学館までお
問い合わせください。

前売り…一般 1700円、高校生以下 1200円

当日…一般 2000円、高校生以下 1500円

※全席自由。

※身体障害者手帳・療育手帳・障害者手帳所持者と介護者(1名)は各3割引。

2000年春季企画展

没後40年 追憶の吉井 勇

4月15(土)～5月28日(日)

関連催しもの

※入場無料。文学館ホールにて

◆特別記念講演会

<1部>講演

日時／4月22日(土)14時～

演題／「追憶の吉井勇」

講師／妻島季男氏（吉井勇研究家）

<2部>吉井勇の肉声を聞く

（昭和32年RKCラジオにて放送の番組）

<参加申し込み>往復はがきに住所・氏名・電話番号を明記
の上、県立文学館「吉井勇記念講演会」係まで。

定員（100名）になり次第締め切ります。

当日余席があれば聴講できます。

2000年初夏企画展

宮尾登美子展

『一絃の琴』…そして『權』『春燈』『朱夏』

～映像化された作品群（仮）

6月6日(火)～7月2日(日)

手織り木綿・紬のような独自の流麗な文体で、
日本の風土や因習の中で生きる女性の心理を丁寧
に描き出し、人々に深い感動を与えつづける宮
尾作品の数々。今回の企画展では、作品「一絃の
琴」を中心テーマとして展開。宮尾文学に親しん
でいただけるよう展示構成し、宮尾文学の魅力に
迫ります。

常設展示

催しもの

特別企画展

【休館日】4月—3, 10, 17, 24日 5月—1, 8, 15, 22, 29日 6月—5, 12, 19, 26日

特別企画展予告 夏季特別展「幻の童謡詩人・金子みすゞの世界展」7月8日(土)～8月20日(日)

深く温かなまなざしの生命をみつめ、宝石のように美しい言葉を残しながら、はかなく散っていった詩人の素顔を、貴重な直筆資料などで紹介いたします。

利用案内

開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時30分まで)
休館日 毎週月曜日(休日・祝日の場合はその翌日)
 年末年始(12月26日～1月1日)
観覧料 一般350円
 特別企画展のあるときは、料金が変わります。〔一般550円〕
 20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県(市)長寿
 手帳所持者及び身体障害者手帳、療育手帳、障害者手帳
 所持者等とその介護者1名は無料です。
駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



- 高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
- JR高知駅下車徒歩20分
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高 知 県 立
文学館

高知市丸ノ内1丁目1-20
 電話 088-822-0231
 FAX 088-871-7857
 e-mail bungaku@tosa.net-kochi.gr.jp
 http://www2.net-kochi.gr.jp/~kenbunka/bungaku/
 〒780-0850